

ディスコミュニケーション

鶴見俊輔の戦後と言語への関心

鈴木園巳

1 はじめに——敗戦と言語への関心

「国家体制の変動はしばしば言語への関心をともなうといわれるように、敗戦後の日本においても、言語をめぐる多くの議論が展開された。さまざまな立場からのこれら多種多様な議論、提案、要求は単純に分類されるものではないが、ここでは便宜的に大きくふたとおりの方向を示してみたい。まずひとつは、B・アンダーソンが「配電システム」と呼んだような国家の統治のシステムとして言語を考える方向、あるいは「国民」の紐帯としての言語のありかたを問う方向である。戦前・戦中に

は保守派が、戦後には左派が民族主義^①の立場から主張したように、これらは共同体を想像させ、機能させる要素としての日本語をどう整備していくのかという方向からの関心であった。

もうひとつは、言語の運用やそのものもつ影響力への関心である。言語をとおして人は多くの情報を得、ものを考える。戦時には戦意を鼓舞するような言葉が数多く流布したが、これはそれらの言葉に操られ、あるいは無批判にそれを受け入れていたのではないかといった、言語と人間の思想や行為についての関心、すなわち言語がどのように人々の思考、行動に影響を与えたのかという反省であり問いである^②。これらふたつの方向

性は必ずしも明確な境界線をもつものではなく、多くは複雑に絡み合うが、前者の統治のシステムとしての言語への言及も、後者の言葉の影響力を問題にする場合も、どちらも敗戦後の「民主主義」というスローガンと不可分に語られたのがこの時期の特徴であった。教育の格差や空間的な距離を克服して誰もが情報、知識を共有し、平等な立場で自由闊達に考えを述べ合うことができるというイメージは、民主的な世の中の実現を象徴する理想であり、言語はまさにその基盤を形成するうえで不可欠な前提と考えられたのである。

本稿でとりあげる鶴見俊輔（一九二二—）も敗戦後の早い時期から言語に関する論文を発表したひとりであったが、彼の関心の持ち方は上述の区分でいえば後者であり、言語の運用についての問題、さらに言語を含むコミュニケーション全般への関心であった。鶴見がここでいうコミュニケーションとは「気持ちと考えの伝え方」を指すものであり、したがってその領域は広範にわたる。彼は言語はもとより思想、宗教、芸術など、文化と呼ばれる領域の問題はコミュニケーションの問題としてとらえることができると考えた。それらは特定の個人や、その個人の内面の純粋な観念から生み出されるのではなく、それぞれの時代における外界との関係のなかで生成されるものであるとともに、その時代のコミュニケーションの習慣が、それぞれ

の時代の考え方に影響を与えたとする立場である。鶴見自身が言うように、これは社会成員間のコミュニケーションが内面化したものが思想であるとするG・H・ミード、さらにはマルクスの『ドイツ・イデオロギー』における交通形態としての思想という考え方に通じる。とくに後者については、鶴見はこれをマルクスのコミュニケーション論として理解し、そこにプラグマティズムに通じる視点があることを指摘している。しかし一方で、当時の日本のマルクス主義の側からそのような解釈はなされることがなく、学問分野としてのコミュニケーション科学については、アメリカの政策科学としての出自をもつという理由で懐疑的なまなざしが向けられていた。プラグマティズムでいう実践という概念もまた、資本家の私利追求の実践としてのみ理解され、批判の対象となった。鶴見の見出すプラグマティズムとマルクス主義との接点が、マルクス主義側からはほとんど無視されるか、あるいは批判される傾向にあったことは、当時の学問的状况を知るうえでおさえておかなければならないだろう。

これらをふまえ、本稿では敗戦後という時代背景における鶴見の言語およびコミュニケーションに関する論考について検討する。鶴見のコミュニケーション論は、一貫した理論やテーマによって貫かれているというよりは、鶴見自身が体験する事件

や実践のなかで、変容し、ときには修正されているように思われる。本稿で問題とするのもその点であり、何が要因となつて鶴見の思想が変化し、その変化は何を意味するのかについて考察する。主たる対象とするのは一九四六年から一九五七年にかけて発表された論考であり、よつて扱う時期は戦後のほぼ一〇年間となる。

2 言語をめぐる鶴見の議論——その傾向と変化

戦後に寄せられた言語に対するさまざまな方向からの関心において、鶴見の議論の特徴とはどのようなものであつただろうか。

まずひとつ挙げるとすれば、次のような点である。当時、学校教育においても民間教育および運動団体においても、その議論がたとえば右派といわれる側も左派と称される側ともに、その思想的文脈は異なるとしても、やがて国家や国民、民族の輪郭を鮮明にしていくという方向に収れんしていく傾向があつた。それに対し、鶴見の議論はそうした枠組みのなかに回収されない性格をもつていたことである。もうひとつ、敗戦当時、大きな勢力をもつた民主主義科学者協会（民科）がマルクス主義の理論に基づいて言語やコミュニケーションの問題を取り上

げつつ、とくにその言語に関する探求はやがて言語の体系や構造を説明するという、より純粹に言語学的な方向、より「科学的」な方向に進み、専門性を追求して細分化していったのに対し、鶴見の議論は言語とそれが運用される社会との関係といった、より包括的な方向に展開していったことがあげられる¹⁰⁾。

それゆえ科学を標榜する立場からは「観念論」との誇りを受けることにもなつた。こうした鶴見の考察の基底部には、理論と実践との往復運動のなかで現象をとらえようとする態度がある。ここにプラグマティズムの思想が垣間見られるのであるが、前述のように、このような視点から国家機構をはじめとする権力や資本主義、マルクス主義をもコミュニケーションの一形態としてとらえる試みは、当時の文脈において十分に検討され、受け入れられていたとは考えにくい。

よく知られているように、鶴見俊輔は一九三九年から一九四二年にかけてハーバード大学で言語学や哲学、とくに分析哲学とプラグマティズムを学んでいる。戦争中の一九四二年に交換船で日本に送還され、軍属としてジャカルタへ赴くが病気のため帰国、療養中に日本で敗戦を迎えた。一九四六年に発表された「言葉のお守りの使用法について」は、彼の戦争体験がヒントになつたものであり、戦前から戦後にかけて、人々の思考や行為がいかにその時に流布した言葉の力によって振り回されて

いたかが、アメリカで学んだ論理実証主義の言語理論を用いて批判的に論じられている。この論文で、鶴見は、命題を「主張的命題」（＝事実の記述）、「準表現的命題」¹¹⁾（＝事実の記述以外の、価値判断や命令など）、そして「ニセ主張的命題」に分類する。「ニセ主張的命題」の例としては、「米英は鬼畜だ」という命題が挙げられているのだが、これは形式的には主張的命題のように見えても、実は発話者の米英に対する憎しみや攻撃的な感情の状態を表現したものであって、事実の記述ではない。しかし、戦時中は多くの人々によって事実の記述として、すなわち「真」である主張的命題としてあつかわれた。鶴見は言葉の使用におけるこのような無自覚を指摘し、その自覚の無さの要因として、言葉の意味がはっきりしないままに使われていることを問題化する。この論文における鶴見の力点は、タイトルにもあるように言葉のニセ主張的命題の一種である「お守りの使用法」に置かれており、この、「社会の権力者によって正統と認められている価値体系を代表する言葉」が流通することの危険は、現代においてもアクチュアルな問題を提起する論点であるのだが、本稿においてはむしろ、これら「ニセ主張的命題」に対する処方箋として鶴見が提示した議論に注目したい。

鶴見の初期の言語論およびコミュニケーション論を考察の対象とした論文は多くはないが、最近、藤野寛がドイツのフラン

クフルト学派と日本の『思想の科学』との対比から¹²⁾、伊勢田哲治が分析哲学という枠組みから¹³⁾、それぞれ鶴見の言語論に関心を寄せている。藤野および伊勢田は、「言葉のお守りの使用法について」を鶴見の正統派分析哲学者としての関心が純粹な形であらわれた論考であるとし、論理実証主義に基づく言語分析として位置づける。このことはすなわち鶴見の主張が「科学主義」的な言語観に依拠しているということの意味するのであるが、藤野（二〇〇九）によれば、「科学主義」的な言語観とは以下のようなものである。

科学主義は、実証主義をより大きな背景とする。ある命題は、その内容が事実と一致することが証示された時、真であると見なされ、真なる命題の集合が科学である、と考えられる。言葉は、事実を正確に写し取る時、真理表現のメディアたりうる、とする考えを、科学主義的言語観は採用するのだ。

〔……〕

「世界を正確に写し取る言語表現」が目標になるのだとすれば、問題になるのは、対応関係だろう。ある命題を構成する語は、世界の中に対応する対象をもつでなければならぬ、と。すると、「神」という語を含む命題は失格になるだろうし、例えば「意志」についても怪しくなる。¹⁴⁾

語（語からなる文）と指示対象（指示対象からなる世界）に対応関係が成立しているとき、その文は「真」である——これが、論理実証主義をささえる基本思想のひとつ（対応説）であり、事実と語の対応関係に関して徹底して厳格であること、これが「ニセ主張的命題」に対処する鶴見の要請のひとつであった。この徹底した論理実証主義が、やがて鶴見自身によって否定される、ないし、よりプラグマティズムの方向へとシフトしていく、というのが伊勢田、藤野両者の共有する見解である。本稿もある種のプラグマティズムへの変化が認められるという点に同意するが、藤野（二〇〇九）においては、その変化の要因は追究されていない。伊勢田（二〇〇九）は、「外来の道具をつかって日本の状況を分析するという構図への違和感」がその理由のひとつであろうと指摘する。これはもっともな指摘であり、それを裏付ける鶴見自身の発言もあるのだが¹⁵、本稿ではこの「違和感」は、鶴見個人の資質や経年による思想の変容というよりは、具体的な外的要因が大きく関与しているものともみる。敗戦後の歴史的背景の中で、論理実証主義の通用しない具体的な事件との遭遇が、鶴見の科学的明晰さに対する信頼を根底から揺るがし、それ以前の思索の方向性の変更を余儀なくさせたのではないだろうか。そこには、次第に他の方法に移行

したという以上の確信的な転換への意思とオルタナティブな方法の模索が感じられるのだ。

「世界の思潮をわが国に移入する」という、——おそらく当時の留学組の使命感であり気負いでもあり、また日本のエリートとしての優越感でもあったかもしれない——『思想の科学』創刊号の冒頭の「創刊の趣旨」を、その後一九七二年に振り返り、「書き写すのもつらい文章」¹⁶と感じるほどそこから距離を置くようになった背景には、やはり外在的なインパクトが関連していると考えるのが自然ではないだろうか。「外から中をのぞきこむ手段」を否定することは、外から中をのぞきこんでいた自分自身のあり方の否定でもあるだろう。鶴見が自身の学問の道具としての方法を問い直さざるを得ないような出来事とは何だったのか。自らがある状況の只中にいること、そしてそこに巻き込まれていることを意識せざるを得ないような事件、さらにそれを要因とする思想の変化は、どのようなコンテクストのなかで起こり、どのような意味をもったのか。以下では「言葉のお守り」の使用法について¹⁷以降の鶴見の論考の読解をおおしてその変容の要因を検証する。

3 明晰さのつまづき

論理実証主義の色が濃かった鶴見の論調に変化が現れたのは、一九五二年の論文「二人の哲学者——デューイと菅季治の場合」(以下、「二人の哲学者」とする。)であろう。ここで鶴見はデイスコミュニケーションという和製英語を初めて用いるのだが、戦後のある事件について考察したこの論考は、鶴見の言語およびコミュニケーション論のひとつの分岐点を示すものとしてみることでできるのではないだろうか。

当初「コミュニケーション」のタイトルで発表されたこの論文は、ソビエト抑留中に收容所の通訳を務めた人物、菅季治(京都大学大学院で哲学を研究)が、帰国の翌年の一九五〇年、衆議院特別委員会に参考人として呼び出された後に自殺するという出来事を取り上げている。この事件の背景には、アメリカの占領政策の右旋回と、それにとまなうレッドパージがあった。当時、ソ連からの帰還者たちから、日本共産党書記長徳田球一がソ連に対し、日本人捕虜のうち反動的な者は日本に帰すなと要請したという噂が広がる。菅は、ソ連将校の言葉を日本人捕虜たちに通訳した人物として証言を求められていた。

菅は次のように証言する。自分は、ソ連抑留地で「いつ日本に帰れるのか」という日本人捕虜の質問に対するソ連の政治部

将校の答えを日本語に「直訳」し、以下のように伝えた。
「……」ここで良心的に労働し、真正の民主主義者となるとき諸君は帰れるのである。日本共産党書記長徳田は、諸君が反動分子としてではなく、よく準備された民主主義者として帰国することを期待している」と。ソ連の将校がこのように述べ、それを通訳したことは菅にとっての「事実」である。しかし、実際に徳田がそう述べたのかどうかという点については自分は知り得ない、というのが菅の証言のスタンスであった。しかし、議員たちの質問は事実から逸れて、その内容についての菅の解釈を求めるものとなっていく。

高木(松)委員(自由党)　そこであなたが良心的に訳すということとはわかりますが、「真正の民主主義者」というのは、いったいその言葉の内容を構成するものは何ですか。

高木(松)委員　そこであなたに聞きたいのだが、特に「真正」の文字を頭にかけておりますね。あなたのお答えになった単なる「民主主義者」という言葉で表現される内容は、あるいはそうであるのじゃないかと肯定できるが、真正と特につけたのは、まっ赤な共産党という意味じゃないですか。

「……」

安部委員 あなたが言うところの民主主義というものは、われわれの了解しているデモクラシー、英国とかあるいはアメリカのデモクラシーというものとは違って、ほんとうの意味における共産主義のことを民主主義というのでしょうか。

安部委員 そうすれば、あなたが民主主義に協力すれば、やはり共産主義に協力したわけですね。

安部委員 そうすれば実行の上でもそういう共産主義の行動をとったわけですね。(傍点、原文。)²⁰

「事実」を「ありのまま」に述べようとする菅に対し、議員たちの質問は、彼が共産黨員であり、黨員として意図的に事実をねじまげた通訳をしたという、彼らのなかでは確定している「事実」を確認するための尋問であった。思いがけない成り行きに菅は深く絶望し、直後に『ソクラテスの弁明』をポケットに入れて鉄道自殺をする。

鶴見はこの出来事を、これまで菅の人生を支えてきた、事実を事実として伝えることは可能であるという「完全なるコミュニケーションの神話」の崩壊とみる。菅の理想は、「まぜものなしの真理のみが、自分から、他の人にむかってコミュニケーション

トされ」ることであり、「コミュニケーションは、その過程において内容を色づけしたりしないように、完全に透明でなければなら」なかった。菅のこの理想を鶴見は、デューイの思想——ディスコミュニケーションを悪として無視するユートピアニズム——と重ね合わせる²¹。

一九五七年には「自由主義者の試金石」²²において、これと類似の事例がとりあげられている。こちらは、鶴見にとってより身近な事件であった。ハーバード時代に鶴見の世話をし、彼をプラグマティズムに導いた人物でもある都留重人が一九五七年、米国上院の公聴会に呼ばれるという、いわゆる「都留喚問」である。ここで都留は、歴史家でありカナダの外交官でもある友人のハーバード・ノーマンが共産主義者であるかどうかについての証言を求められた。都留もまた、菅と同様に誠実さをもって、自分の知りうる事実を話そうと試みる。この公聴会に出てくるノーマンをはじめとする多くの人名のすべてについて、「都留氏が一貫してとった態度は、共産黨員であるという決定的評価をさけて、「知っている」、「何年に会った」、「官職は何であった」というような単純事実命題にとどまっていた²³。それは、当該の人物にとって「致命的な何らの特徴も記述しない」²⁴。にもかかわらず、「この単純事実命題が一個の孤立

した命題として意味をもつことからはなれて、委員会の討論の文脈に入った時、都留氏の提供した一個の単純事実命題は別の意味をもたされる」²⁶⁾。このことを鶴見は以下のような例で示す。

「ソクラテスは人である」という命題を私が出したとする。

委員会の別のメンバーがすかさず「その人は米国共産党員だと検証されています」(この場合の検証とは identity であって、論理的な検証「test」とちがう)と挿入すれば、委員会の議事の結論としては「ソクラテスは米国共産党員である」ということを立証したことになる。「……」「われわれの言葉はわれわれ各自からはぎとられて、予想外の意味をわれわれにもたらすのだ」。(括弧内、原文)²⁶⁾

その後ノーマンは自死するが、その死は日本のメディアによって都留の証言と関連付けて報じられることとなる。生涯の師と慕う人物が、アメリカ上院の意向をそのまま引き受けたような日本のジャーナリズムの報じ方によって、侮蔑と批判にさらされたのだ。鶴見は新聞で事件の報道を見たとき、「髪の毛が一部白くなった」と回想するほどの衝撃を受ける²⁷⁾。

鶴見は委員会における都留の証言を検討したうえで、論理実証主義、ならびにプラグマティズム双方の限界について次のように述べている。

都留証言も全体の論理は、第一にあたえられた委員会の場にあわせてその思想的前提をうけいれながら、辛抱よく自分の主張を出して行く、という意味ではプラグマティックであり、第二に「その人を知っている」とか「何年に会った」とかいいう単純事実命題になるべく限定して交友関係を記述する、という意味では論理実証主義的である。だが、委員会というコミュニケーションの場をうけいれ、それに自己を適應させるという意味では、妥協になりやすく、(……)さらに、(都留が証言したように) コンスタンス・カイルやニービルについて、かれらがマルクス主義的綱領の作成に主役をつとめたこと、その他の「単純事実命題」をあげることは、論理実証主義的にいえば、事実であるのだし、そこに何らのまちがいもないのだが、共産主義分子から教職をうばい、かれらに生活上の圧迫までくわえようとしている米国上院委員会にたいして、このような論理実証主義でおし通すときには、単なる事実命題の提出が、結果としては決定的価値評価をふく

むことに転化されてしまう。この証言の記録は、プラグマテイズムおよび論理実証主義の論理が、いかなる場面において有効でないかを教える。²⁵⁾(括弧内、引用者。)

論理実証主義的アプローチを試みていた鶴見の関心には、言葉と対象を問題とする意味論的傾向が強かったとすれば、ここで示されているのは言葉と人との関係であり、とりわけコミュニケーションの場にはたらく力関係の不均衡が焦点化されている。「二人の哲学者」において、鶴見は次のように述べている。「コミュニケーションとは、二つ以上の動物における意味の共有状態をいうわけだが、そのかぎりにおいて習慣の同一性をもたらず²⁶⁾。これは、本稿冒頭で紹介した同じく鶴見の「(コミュニケーション) 気持ちと考えの伝え方」よりも、より動態としてのコミュニケーションの性質に注目した表現である。コミュニケーションが成立あるいは成功するということは、その場において意味が共有されたということだ。鶴見によれば、そのような状態つまり意味の共有状態は、生活水準や階級、民族、国家、男女、その他さまざまな要素が関与する習慣の同一化によって成り立つものである。あるいは同一化されているという想定のもとに、といってもよいだろう。しかし現実の社会では、さまざまな権力やそれともなう利害関係が、それぞれの立場

から見える世界像を異なるものにし、意味の共有状態に絶えず亀裂を入れていくのだ。コミュニケーションがディスコミュニケーションという状態としてあらわれるのは、このようなときである。それぞれの立場によって言葉と対象、さらにはその言葉の指し示す世界との対応関係にズレが生じるとき、さらにそこに権力が介入するとき、相手の前提とする場、言葉、世界とどう対峙すべきか——。プラグマティックにそれらを受け入れつつコミュニケーションを図る努力、言いかえればディスコミュニケーションの状態をなくそうとする努力は、権力を持ったない者にとってどのような結果をもたらすかは、菅や都留の喚問でみたとおりである。圧倒的な力関係の不均衡に遭遇したとき、ディスコミュニケーションは意味の共有状態の否認として、権力に抵抗する手段として見出されることになる。

ここで想起されるのが、後に鶴見も関心を示している²⁷⁾ M・パフチンの言語理論である。パフチンは言語を、現実の一部を切り取るだけでなくその外部に存在する別の現実を反映し、屈折させるものとして取り出そうとする。

支配階級は、イデオロギイの記号に超階級的な永遠の性格をそえ、そのなかでおこなわれているもろもろの社会的評価の闘争を鎮め、内部に追いやり、記号を単一アクセントのもの

のにしよとす。

だが実際には、どの生きたイデオロギーの記号もヤヌスのようにふたつの顔をもっている。広く使われているどんな罵言も賞讃の言葉となりうるし、通用している真理が他の多くの入びとにとってたいへんな虚言にひびくことはさけられない。記号が内部にはらむこのような弁証法的性質は、社会的危機や革命的変動の時代にのみ徹底的にあらわされる。ふつうの状態の社会生活では、各イデオロギーの記号に詰められた矛盾は完全にはあきらかにされえない。というのも、支配的な既存のイデオロギーのなかでは、イデオロギー的記号はつねにいくらか反動的なものであり、いわば社会生成の弁証法的流れにおける先行する契機を安定化させ、昨日の真実を今日の真実のようにアクセントづけようとするからである。^②

記号に反映されている現実はそのにただ反映されているだけではなく、社会的利害の交差によって屈折させられている。そうであるならば、言葉と指示対象の結びつきは常に自明で安定的なものではなく、言語は支配的な力と対抗的な力がぶつかり合う場、意味を奪い合う場でもあるという認識も生じる。鶴見がディスコミュニケーションをディスコミュニケーションとして明確化することの重要性を強調し^③、「ディスコミュニケーション

ションそれじしんの力を利用して、歴史の進歩を計ろうとする革命の立場」^④に期待を寄せるのも、コミュニケーションの場にはたらく権力を意識してのことであろう。

4 方法としてのディスコミュニケーション

ここでふたたび「言葉のお守りの使用法について」の問題に立ち返ってみよう。「ニセ主張的命題」によって成立しているかに見えるコミュニケーションは、無自覚な言葉の運用や、言葉の意味の把握の不明瞭であることなどにより、双方の自律的な思考のやりとりとは言えない。しかし、ある状況において支配的な意味を話し手と聞き手が相互行為で読み取り、ある種の秩序——それが「良い」ものであれ「悪い」ものであれ——を再生産しあっているという点においては、コミュニケーションは「成功」していると言えなくもない。このようなコミュニケーションの成立する場においては、たとえ自覚的でないにせよ双方がそこに安定したコードを想定し、あるいは求めているのであり、それを読み損なうことこそが逸脱であり失敗なのだ。この場合、たとえ暫定的にであれ、自分自身をそのコードを支配的とするシステムに帰属するものとして想像しているのである。このように考えると、鶴見の批判はこのようなコミュニケ

ーションの「成功」によって再生産されるシステムに向けられているという理解が成り立つ。

そこで鶴見は言葉の使用の改良によって、ひとびとの思考が自律的に、明晰になることを要請した。しかし、言語の使用の現場において、個人がその意味を明確に定義し、自律的に思考し、明晰に伝えることを試みたとしても、また発言を「事実」の記述に限定しようとしても、それが権力による暴力的な解釈に抵抗することができなかったことは、これまでに見てきたとおりである。論理実証主義を徹底しても、そこから支配的、抑圧的なシステムのありかたを問題とする契機や、抵抗の機会をつかむことは困難なのであった。その限界を示しているのが、菅季治と都留重人のケースだったと言えるだろう。言葉と指し対象（＝事実）との対応関係は、権力によってすり替えられ、言葉は予想外の意味を付与される。自明であったはずの語と指し対象（＝事実）の関係がゆらぐときは、パフチンの指摘するように、危機や変動のときであり、社会のシステムそのものが不安定でゆらいでいるときである。

鶴見は、コミュニケーションについての考察や分析は、ディスコミュニケーションも視野にいれたものでなければならぬと言っている。従来コミュニケーションの逸脱として忌避され、あるいは矯正され、克服されるべき状態としてとらえられてきたデ

イスコミュニケーションの諸形態について検証し、コミュニケーションをディスコミュニケーションとの相互作用によって理解することにこそ、われわれが生きる社会の様相をつかむ手がかりがあるのではないかというのが、「二人の哲学者」以降示される鶴見の提起であった。コミュニケーション論における鶴見の独自性は、コミュニケーション不全の状態すなわちディスコミュニケーションこそをわれわれの世界の常態としてとらえ、その積極的な可能性を指摘した点にある。「ニセ主張的命題」が跋扈するコミュニケーションが、支配的ないし権威的なコードを読み取り、再生産するようなコミュニケーションであるならば、ディスコミュニケーションこそそれを脱臼させる契機というわけだ。

ここでいうディスコミュニケーションは、一方的に対話の回路を閉ざすことを意味しない。例えばメキシコ人が征服者の伝えたキリスト教のシンボルを受け入れつつも、その儀式に土着のモチーフをすべり込ませたように、「あたえられた（支配的な、あるいは「真正」の）象徴のなかにさりげなく別の意味をもちこむ流儀」（括弧内、引用者。）も一種のディスコミュニケーションのかたちであり、鶴見はそこに「かんたんには根がやしにできない抵抗の伝統」³⁴を見る。このようなコミュニケーション論のとらえかたは、鶴見の大衆思想への関心とつなが

るものであるとともに、「純粹主義」や「真のもの」を追求する志向に対する懷疑という点で、転向研究——例えば「偽装転向」の分析——にも連なる視点でもあり、つねに鶴見の思想の根底にある重要な思考法の一面面であるう。

5 むすびにかえて

以上、鶴見の一九四六年の「言葉のお守りの使用方法について」に見られた論理実証主義的傾向が、後に鶴見自身によって否定ないし積極的関心が払われなくなったという前提にたち、その理論的関心の変容がどのような具体的事実に起因するものであるかを問うとともに、その変化がどのような質的転換を意味するのかについて検討した。

ディスコミュニケーションのさまざまなあり方に注目するという鶴見の視点は、形を変えつつ、その射程を広げながらその後の論考に継続して現れる。しかしながら、その重要性に比し

て言及されることが少ないように思われる。鶴見は「二人の哲学者」について、「権力のない人間はウソをつくことによって、かろうじて身を守ることができるところから見た」²³と述べている。このような観点は、政治や権力の抑圧の問題のみならず、さまざまなイデオロギーや文化の形態やそれらの交流を分析するうえで、多くの可能性を持つものと考えられる。

また、九〇年代以降、国民国家批判の枠組みのなかで、戦前戦中における日本の言語政策およびアイデンティティとしての言語の構築に関して、多くの研究がその成果をあげてきた。これは本稿冒頭のふたつの区分でいえば、国家の統治のシステムとして言語を考える方向、あるいは「国民」の紐帯としての言語のありかたを問う方向の研究である。しかし一方で、本稿の立場、すなわち言語の運用やそれのもつ影響力への関心からの論考はあまりさかんになされているとは言い難い。この点に關しても、今後さらに検討が必要になるであろう。

- (1) B・アンダーソン『増補 想像の共同体 ナショナルイズムの起源と流行』、NIT出版、一九九七年、二六六頁。(Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Revised Edition, Verso: London, 1983)
- (2) 戦後左派の民族主義に関しては、小熊英二「忘れられた民族問題——戦後日本の『革新ナショナルイズム』』『相關社会学』第5号、一九九五年(のち加筆し、『日本人』の境界』(第二章)、新曜社、一九九八年に所収)。同前『民主』と『愛国』(第八章)、新曜社、二〇〇二年に詳し。
- (3) たとえば民主主義科学者協会(民科)の初期メンバーであった数学者ものべながおきは後に、「八紘一宇」といったかけ声によって、自発的に労役に従事するような精神構造が自分にもあったのではないかと自問したり、日本人の言語能力の原因を漢字の使用によるものと考えたことを回想している(『幻影の民主主義科学』『朝日ジャーナル』、朝日新聞社、一九六九年一〇月二六日号)。また、同じく民科に所属した言語学者の大久保忠利は戦時中について、言葉が命令に服従させるためだけに使われており、殺すこと、殺されることさえ言葉による美化で満たされていたと振り返り、戦後は人間の復活を言語の方からやろうとしたと述べている。(鶴見俊輔「語り継ぐ戦後史(上) 鶴見俊輔対談、編集」講談社文庫、一九七五年、二九八—二九九頁)。
- (4) 久野収、鶴見俊輔 編『思想の科学事典』、勁草書房、一九六九年、三二八頁。
- (5) 一九四七年十一月から四八年一月にかけて、思想の科学主催による「コミュニケーション講座」が開催された。当時、コミュニケーションということばそのものは日本にはほとんど浸透していなかったが、日本人の気持ちと考えのかた(「コミュニケーション」というひとつの総合的な主題を設定して日本の文化活動の全体をとらえることが、この講座の目標であったという(同前『思想の科学事典』、三二八頁)。その演題は日本の演説(鶴見祐輔)・音楽(兼常清佐)・詩歌(土岐善麿)・言語(柳田国男、石黒修、小林英夫)・表情(宮城音弥)・教育(城戸幡太郎)・映画(山本嘉次郎)など多岐にわたった。(渡辺通子、「昭和二〇年代コミュニケーション概念の導入——雑誌『思想の科学』を中心に——」『国語科教育』五五(二〇〇四)〇三三—三三二頁、二〇〇四年)。
- (6) 鶴見俊輔「コミュニケーション史へのおぼえがき」、『鶴見俊輔集』第三巻 記号論集、筑摩書房、一九九二年、二二六頁。(初出：江藤文夫・鶴見俊輔・山本明編『講座 コミュニケーション』第二巻 コミュニケーション、研究社、一九七三年)。以下、本稿で言及する鶴見の論文に関しては、これらの収録されている著作集のうち一九九二年に発行された『鶴見俊輔集』(筑摩書房)での頁を引用元として表示する。初出からの加筆・修正がどこにされている場合、本稿の議論に差支えがない限りにおいてそのまま記著作集を利用する。初出の旧仮名づかい・旧字体および文語表現が、新仮名づかい・新字体、口語表現にあためらわれている場合もそれに従う。
- (7) 鶴見俊輔「マルクス主義のコミュニケーション論」、同前、八〇頁。(初出：『思想』第三九七号、岩波書店、一九五七年)。

- (8) 鶴見俊輔「コミュニケーション史上のアメリカ」、同前、一二三頁。(初出:『現代アメリカのコミュニケーションの諸相』の標題で発表、都留重人編『現代アメリカの思想』所収、河出新書、一九五六年。
- (9) 安田常雄「民主主義科学」と『思想の科学』——戦後思想の発想と方法——、安田常雄 天野正子編『戦後「啓蒙」思想の遺したるもの』、久山社、一九九二年、七〇—七二頁。
- (10) 発足当初は、民科においても多様な学問的背景からのさまざまな言語へのアプローチがあった。ちなみに一九五一年、一九五二年の役員名簿には、評議員として鶴見俊輔の名前も見える。民科における言語研究は次第に一元化し、とくに一九五四年からは、のちに言語学研究会を率いる奥田靖雄を中心とした、言語現象を記述するスタイルが主流になっていく。
- (11) 「準表現的命題」は、初出の『思想の科学』創刊号においては、「純表現的命題」と表記されている。
- (12) 藤野寛「言葉の力」をめぐる考察——第二次世界大戦直後の言語表現／言語批判——、「思想」第一〇二二号、岩波書店、二〇〇九年。
- (13) 伊勢田哲治「分析哲学者としての鶴見俊輔」、『思想』第一〇二二号、岩波書店、二〇〇九年。
- (14) 藤野、同前、四九頁。
- (15) 鶴見俊輔「素材と方法」『鶴見俊輔集』第四巻、転向研究、同前、四七八頁。(初出:『思想の科学』、一九七二年三月号。)
- (16) 同前、四八〇頁。
- (17) 鶴見俊輔「二人の哲学者——デューイの場合と菅季治の場合——」『鶴見俊輔集』第二巻、先行者たち、同前。(初出:『折衷主義の立場』、筑摩書房、一九六一年。後に『不定形思想』、
- 文芸春秋、一九六八年、所収。また『鶴見俊輔著作集』第三巻、筑摩書房、一九七五年、所収。)
- (18) これは鶴見による造語である可能性が高い。
- (19) 鶴見俊輔「コミュニケーション」、思想の科学研究会、鶴見和子編『デューイ研究——アメリカ的考え方の批判——』一九五二年。
- (20) 鶴見俊輔「二人の哲学者——デューイの場合と菅季治の場合——」、同前、二六七頁。
- (21) 同前、二七九頁。
- (22) 鶴見俊輔「自由主義者の試金石」『鶴見俊輔集』第九巻、方法としてのアナキズム、同前。(初出:『展望』、筑摩書房、一九七〇年一月。)
- (23) 同前、一四三頁。
- (24) 同前、一四二頁。
- (25) 同前、一四二頁。
- (26) 同前、一四三頁。
- (27) 鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二『戦争が遺したもの』鶴見俊輔に戦後世代が聞く、新曜社、二〇〇四年、二二二—二二三頁。
- (28) 鶴見俊輔「自由主義者の試金石」、同前、一五二—一五三頁。
- (29) 鶴見俊輔「二人の哲学者——デューイの場合と菅季治の場合——」、同前、二八〇頁。
- (30) 鶴見俊輔『期待と回想 語り下ろし伝』、朝日文庫、二〇〇八年、一八六頁。(初出:晶文社、一九九七年。)
- (31) ミハイル・バフチン『マルクス主義と言語哲学』、未来社、一九八九年、三九頁。(Volosinov (= Bakhtin), *Marxism and the philosophy of language*, Harvard University Press, 1929)

- (32) 鶴見俊輔「二人の哲学者——デュロイの場合と菅季治の場合——」、同前、二八六頁（註九）。
- (33) 同前、二八一頁。

- (34) 鶴見俊輔「コミュニケーション史へのおぼえがき」、同前、一三一頁。
- (35) 鶴見俊輔『期待と回想 語り下ろし伝』、同前、一六八頁。
(すずき そのみ／博士後期課程)